

N O T I C E !

※今回の締切りは7月15日(必着)です。

第三国の報道

- 6月20日の朝日：大本営海軍部の発表によると、帝国海軍は18日未明より19日にかけて南方海域においてアメリカ艦隊と決戦、敵艦多数を撃沈した模様。
- 同日のニューヨークタイムス：合衆国海軍省の発表では、M. A. ミッチャー中将率いる第58機動部隊は18日未明からの大規模な決戦において日本海軍の主要艦艇多数を撃破、海上航空戦力を壊滅状態に追い込んだ模様。
- 6月末のロンドンデイリー：ノルマンディーから大陸に上陸を開始した連合軍は、日増しに増強されつづけている。軍部の発表によれば、来る8月初頭より、十分に準備が整えられた段階でドイツ本土方面へ大規模な地上戦力が進撃を開始する予定とのことである。

Q & A

- Q1：正規軍の構成が知りたい。
- A1：主力だけでいくと、イザベリアは戦闘機が震電。爆撃機は流星改と連山。イエールは戦闘機がF5U、爆撃機はTBMとB-24。他にもチマチマいろんなのを使っていますが、大体そんなとこです。
- Q2：機体数の上限が21機って、どういうことですか？
- A2：読んだとおりです。なにしろ一人で何十機も送って寄越す人がいたものですから。それに21機だと参加料が1000円で、キリがいいんですよ。
- Q3：前回の「債務帳消し」(イエール)について。「現在高」がマイナスのものは0にしてよいということか、「収入を合計しても借金が残るものは残金合計0で計算する」ということか、どっちか。
- A3：キャラシートの「前回残高」がマイナスになっている者はそこを0にしてよいということです。
- Q4：空母部隊について、さすがに大破等で使用不能になった機体は買い替えざるをえませんか？
- A4：当然です。

——永平寺九頭龍 時々小放談——

▼「政治改革」だそうだ。しかし、これを額面通りに受け取ってはいけない。永田町語では、「そろそろネタがなくなったよ」の意味であると思われるからである。思えば、「湾岸戦争」は、彼ら「議員先生」にとって、格好の御馳走であったことだろう。▼遠くの火事である。自分の土地には直接火は届かない。あの油にしても、クウェートが駄目になったところでサウジがいくらでも出してくれる。消防署にいくら金を払うか、それだけのために小田原評定をやっていれば良いのだから、こんなに楽なことはない。▼聞けば、「二世議員」は衆院でも大分の量に達しているそうだ。二世議員の全てが悪いとは言わない。しかし、有能な政治家の息子が必ずしも有能であるかどうか。▼昨今は政治以外にも「二世」が増えてきている。人のことは言えない、私も二世である。いやむしろ、もう十何代も曹洞宗の坊主をやっている家系である。▼恐らく極めて近いうちに選挙があるだろう。「空技廠」の参加者の中にも有権者は何人かいるはずだ。偉そうに言える義理でもないが、今度の選挙では是非「改革」と「二世」の問題について熟考してもらいたい。僧籍の者が選挙民に向かってあれこれ言うのも考え物とは思うが。

おまけ付きクイズ ファイナル

今回は「空技廠」コースです。今までの二回に比べたら、ある意味で簡単では？

①会長 菊地の学生番号は？

②イザベリアのマスター 岬が入っているサークルは？

i アニメーション愛好会 ii シミュレーションゲーム研究会 iii 推理小説研究会

③現在「空技廠」で手を出していない雑誌は、次のうちどれ？

i テクノポリス ii コンプティーク iii ウォーロック iv R P G マガジン

④現在、岬はハイな状態にあります。彼自身によると、何故でしょう？

i 「サイレントメビウス SIDE 3」の表紙がレビア・マーベリックだったから。

ii 彼女ができたから。

iii 子供ができたから。

⑤「真鶴学園風雲録」計画が始動されたきっかけは？

i 遊演体の「蓬莱～」に影響されて、何となく

ii 菊地の「そんなのがあってもいーんじゃない」発言で、何となく

iii 「榛名とはるな」普及キャンペーンの一環として、計画的に

ヒント.

- ① 6ケタで偶数三つ。下二桁は戦車の名称 ③ 仲間外れは、どれ？
にもあります。全部足すと17。 ④ 大多数にとってはどーでもいいこと。
② ま、常識で考えれば……。 ⑤ うちのパターンでは、ある。

何か書けば当たるかも知れません。何も書かなきゃ絶対当たりません。

前回のクイズの答え。

- ① 左目の傷が消えたんですね。回答して下さった方はみんな「目」に着目してはいたんですが……。惜しい。
② i … 28位 ii … 85位 iii … 41位 iv … 72位
③ 62.9%
④ 東京オリンピック。「皇太子（今上天皇）結婚」は、テレビそのものが普及した要因です。当時はまだ白黒で。
⑤ 大日本帝国海軍。「固有名詞の要らない三大海軍」と言えば、米英+旧日本海軍を指すんです。

今回の当選者は、広島県の秋信敏男さんでした。

☆新しい読者コーナーのこと

「公開質問状」（仮題）てのを考案中です。参加者の皆さんが、我々も含めて他の人へ何か（キャラ名の由来とか）個人的なことを質問して、次の回にその答えを掲載させる方式です。どうでしょう？「やってみたら？」という方は、今回から受け付けますので、質問を書いて送って下さい。その他、RTでやるべき読者参加コーナー案も随時募集します。

A — Strike 時代の背景

☆マリアナ沖海戦の真相の概略について

マリアナ沖海戦。ミッドウェー以上に、日本にとどめを刺した戦鬪である。当然史実にイザベリアとイエールが関与するはずがないが、両国の戦略の相違がこうも致命的影響を及ぼした例はそうないだろう。それは質と量の戦いだった。

日本第一機動艦隊長官は小沢治三郎。「空母機動部隊」構想の第一人者である。彼はここで新戦術「アウトレンジ戦法」を適用しようとした。敵艦載機の攻撃圏外

から攻撃隊を発艦させ、艦隊は戦闘中に前進し、攻撃隊を迎えに行くというものである。上手く行けば当時既に稀少価値が生まれつつあった日本空母の損害を最低限、もしくは皆無に押さえることができるはずだった。

しかし悲しいかな、日本軍パイロットの技量は、要求されるレベルには到底達していなかったのである。作戦指揮のレベルも同様だった。パイロットたちの多くは開戦後大慌てで養成された者たちが過半だった。ミッドウェー海戦で熟練を大量に失った穴を埋める必要があったのだ。夜間着艦の経験がないものも多かった。長距離洋上航法についても同様である。それを大きな群れに仕立て、敵に向かって一直線に突撃させるという思想。多くの戦史書に見られる表現だが、「真珠湾のころから進歩がない」と言っても過言ではなかったのである。大きな痛手をこうむるのは当然の帰結だった。

そして、敵が悪かった。アメリカ第58機動部隊の指揮官はマーク・A・ミッチャー。一瞬で勝敗が決する航空戦の本質を見抜いていた、数少ない将官の一人だった。ほぼ倍の戦力を用意してやってきた彼らに、日本側は対応し切れなかった。

この戦いの後、世界初の機動部隊は姿を消し、二度と再編されることはなかった。

この戦いで生まれた有名な言葉に、「マリアナの七面鳥撃ち」というものがある。余りにもパイロットの練度が低い日本機は、撃墜するのも七面鳥を殺すより簡単だ、という意味だ。栄光の日本海軍航空隊も、この時期までにはここまで落ちていたのだった。そして、この状態で相当数撃ち減らされた彼らは、ロクに補充されないままに台湾沖航空戦、レイテ沖海戦と泥沼の道を進んでいくことになる。

「Blowers」関係の告知

業務連絡。業務連絡。今回の原稿最終締め切りは7月20日にしたいと思います。スタッフの皆さんは遅れないようにして下さいね。

編C後記

菊：何か前回の「榛名とはるな」が好評だったみたいです。「榛名はミサイル戦に弱い」てのがウケたようで。素直に喜ぶ、べき……こと、なんだろうな。ありがとうございます。

岬：↑実は心からうれしかったりするんだろ。素直に感情出せよ。

香：GMABってったら、ヤッパシ「セントルイス・ブルース・マーチ」よね！

宇：百里に行った。時間がなくて、何も見れなかった。何か見れるまで、何度でも行く！

榛名とはるな

本居こじ・作

作者註：この話を常識で読むのは、とてもしんどいです。無理はやめましょう。

ACT. 6 The Recovery. (Sec. 1)

真鶴主港の一番隅にある「大雪丸」の白い船橋では、沿海での慣熟航海に向けて準備が進められていた。既に艦首と船尾にはもやい綱を外すための要員である中一の当番が待機している。後はロープを回収し、碇をあげて出港するだけだ。

榛名は船橋の左ウイングから岸壁を見下ろしていた。ビットのところで当番の中一が退屈そうに参考書を読んでいる。真下から永野が船橋を見上げていて、榛名を見つけるとすぐに手を振ってきた。榛名は苦笑しながら手を振り返すと、すぐに船橋中央の自分のポジションに逃げ込んだ。船内では南雲が出港準備を済ませたところである。

「ムッコ、全員いる？」

「いるわよ。すぐ出られるけど」

榛名は自分の席から船橋をぐるりと見回した。元々が商船だから、今までの「あやせ」や「さらしな」よりもはるかにゆったりとしている。しかも明るい。

「もやい綱外せ」ヘッドセットで待機中の当番に告げ、更に続けた。「タラップ上げ。

レットゴー・ジョア・ライン

いかりも上げて」

「船首すべてよし」「船尾すべてよし」

おもて オールクリア とも オールクリア

出港態勢がすべて整った。榛名は席を立つと、いかにも厳かに、告げた。

「長音一声」

ワン・ロングブロー

すぐに低く長い汽笛が港内に響き渡った。……専門用語の嵐である。南雲の「通訳」なしにそれが通じるのは、この船は特に船舶同好会の生徒が集中的に配置されているからだった。彼らはいわゆる「船マニア」なのだ。

「左舷機関、微速前進」少し遅れてディーゼル特有の振動が届き、船がのそりと右へ首を振り始めると、榛名は続けた。「面舵一杯」

ハード・ポート

「大雪丸」は離岸した。少したって宇垣の「セブンスター」が随伴してくる。必要はないのだが、そこはそれ「義姉妹」だ。それに続いてDEがちらりほらりと周りに環をつくりはじめる。宇垣の子分たちの乗艦だ。いつも冷遇されていてこういったことに縁のない乗組みの生徒たちは、目を白黒させてそのさまをもの珍しげに眺めている。ただ二人、榛名と南雲だけは無然となっていたが、やがてうなずきあうと榛名が言った。

「両舷機関、半速前進」

ハーファヘッド・ツーエンジン

「大雪丸」は速力を上げ、まっすぐ航路へ入っていった。狭い港内では小さい円、巨大な防波堤のわずかな水路を抜けるときは一列に、そして海に出てからは広い円となって艦隊の形も変わっていく。

「栗田先輩」この船では一番古い、操舵手の大原が前を向いたままで声をかけた。「そろそろ沖合一キロ半です」

「はいはい」榛名が正面中央の窓に立った。ヘッドセットのコードを窓の下のジャックにつなぐ。「Ka-27を一機発艦させて」

「それじゃ私は飛行甲板に行くわ」

南雲が戸口でいった。榛名がうなずく。

「面舵。このあたりで大きく周回するわ。機関巡航」

ややあって、中央の少し広くなったところからKa-27が飛びたった。ソ連のこの小型艦載ヘリは二重反転ローターを用いている関係もあって比較的小型であり、大雪丸のような船舶からでもその気になればたやすく運用できるところが強みである。もちろん、本

格的な機体よりは能力に制約を受けてはいる。「大雪丸」の場合は対空レーダーを積んだ早期警戒型のものが、四機搭載されている。

「『大雪丸』より今発艦したへり、何か反応は？」

「こちら『グリーンハット』。『大雪丸』、何も見つかりません。どうぞ」

「了解、『グリーンハット』。そのまま探索を続けて」榛名はそこで少し考えてから、艦内放送にコネクターを切り替えた。「南雲さん、ちょっと」

南雲はすぐに艦内電話で答えてきた。

「なに、榛名？」

「空戦練習のこともう言った？」前方を注視しながら榛名は問いかけた。「できればサブライズでいきたいんだけど」

「わかった」南雲は待機室のMF部員たちをちらりと見て答えた。「じゃそうする」

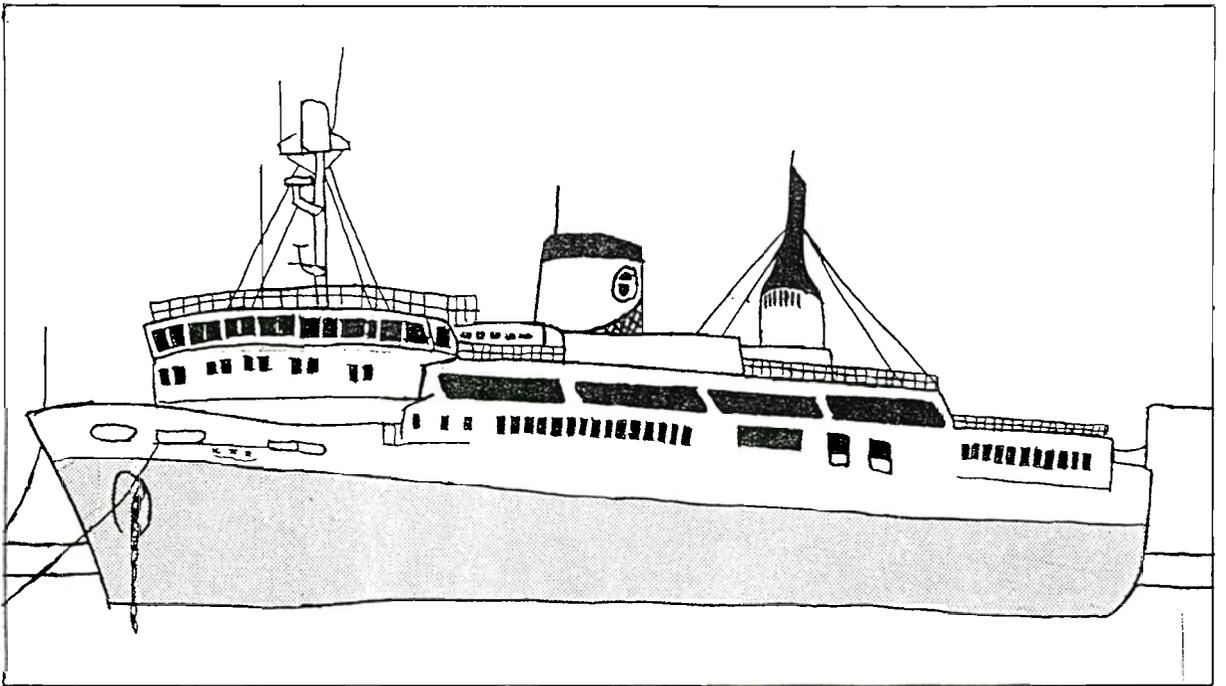
「ムッコ、何？」ハリアー隊の班長の森が、通話機を戻した南雲に声をかけた。彼女は南雲と同じ歳である。「もう発艦？」

「まだよ」南雲はいたずらっぽく笑った。「発艦に気をつけろって」

待機室は、再び若い女の子の黄色い話し声に包まれた。

「『グリーンハット』から『大雪丸』、不明機三機……いや五機、男子部の方から飛来。……F-4一機とF-15四機みたいです。所属はわかりませんが、敵味方識別装置に反応しません」

「『大雪丸』了解」榛名は短く答えると、深く息を吸って気持ちを落ち着けた。「来たわ……対空戦ヨーイ！」



原画：井上 拓軌
仕上：本居 こじ
#上さん、すみません……

「対空戦よおい」同じころに宇垣も僚艦に指示を下していた。「榛名、ハルのF-15と例の赤城とかいう奴のF-4じゃねーのか？」

「多分そうだと思うけどね」無線で榛名が答える。「これからハリアー出すわ。とりあえずスクランブル練習をやりようと思ってんの」

「あいよ」宇垣は納得した。どうりで『大雪丸』の動きが不自然なはずだ。「じゃこっちは水上見張ってらあ」

「お願いね」答えると、榛名は艦内放送をかけた。「至急、至急、未確認機接近中。ハリアー隊は全機スクランブル。繰り返す、ハリアーは全機スクランブル！」

瞬間に艦内の空気が緊迫した。榛名はすぐにこの前家に帰ったとき見た古い映画を思いだし、「アウェイ・オール・ハリアーズ」とやればよかったと思ったが、すぐにその考えを取り消した。誰もわからないはずだからだ。わかるとしても南雲ぐらいだろう。

格納甲板まで駐車エリアが降ろされてできた開口部から、南雲の指揮でハリアーが次々に発艦し始めた。それなりに静かだった辺りの海面が、急にジェットのとてる金属的な爆音に包まれる。

「こちら『ホーネット』リーダー、『大雪丸』ブリッジどうぞ」

発艦したばかりの森が無線で呼び掛けた。ん、速い、とひとりごちながら榛名はヘッドセットのマイクを口元に寄せた。「こちら『大雪丸』ブリッジ。何か？」

「今二機……いや三機出た。未確認機ってどこ？」

「方位0-4-3、距離5キロってとこ」榛名は頭上のマルチスクリーンを見上げながら告げた。「もう来るわよ！テキはF-15四機にF-4一機。それ以上はわからないわ」

「OK。今全機出た。これから迎撃する」

「『グリーンハット』から『大雪丸』、男子部の艦隊を発見しました」

まさか、と榛名は思った。この辺りまで男子部の艦隊が来るなど、年一度の文化祭と男女対抗戦の時ぐらいのものである。

「何隻？」彼女はそれでも機になって尋ねた。「たくさん？」

「細かくはわかりませんが、対空の方でコンピューターが一杯で……」しまった、と榛名は下唇をかんだ。これをなんとなく予期して宇垣に水上見張りを任せたのだが、不十分だったようだ。どうも「さらしな」がやられてからというもの、調子が狂い放しである。「グリーンハット」のオペレーターは報告を続けた。「……四隻くらいみたいですけど」

「麻美、男子部の艦隊がこっち来てるみたい。充分気をつけて」

「おう、今聞いた。まかしとけ！」

宇垣の答えは威勢良かったが、余りアテにはなるまい。榛名は読んだ。宇垣の艦は「たかつき」級で、長距離戦の能力はない。他のDEはなおさらだ。

「へりを追加！」彼女は艦内放送で指示した。「至急！」

「榛名、基地から増援呼んでもいい？」南雲が言い返してきた。「そっちの方が効果あるかもよ！」

「いいけど、無理強いはしないでよ」

「大丈夫、何はさておいてもすぐ飛んでくるって」

「……………!？」

少しおいて、南雲はまた艦内電話で話しかけてきた。彼女は言った。

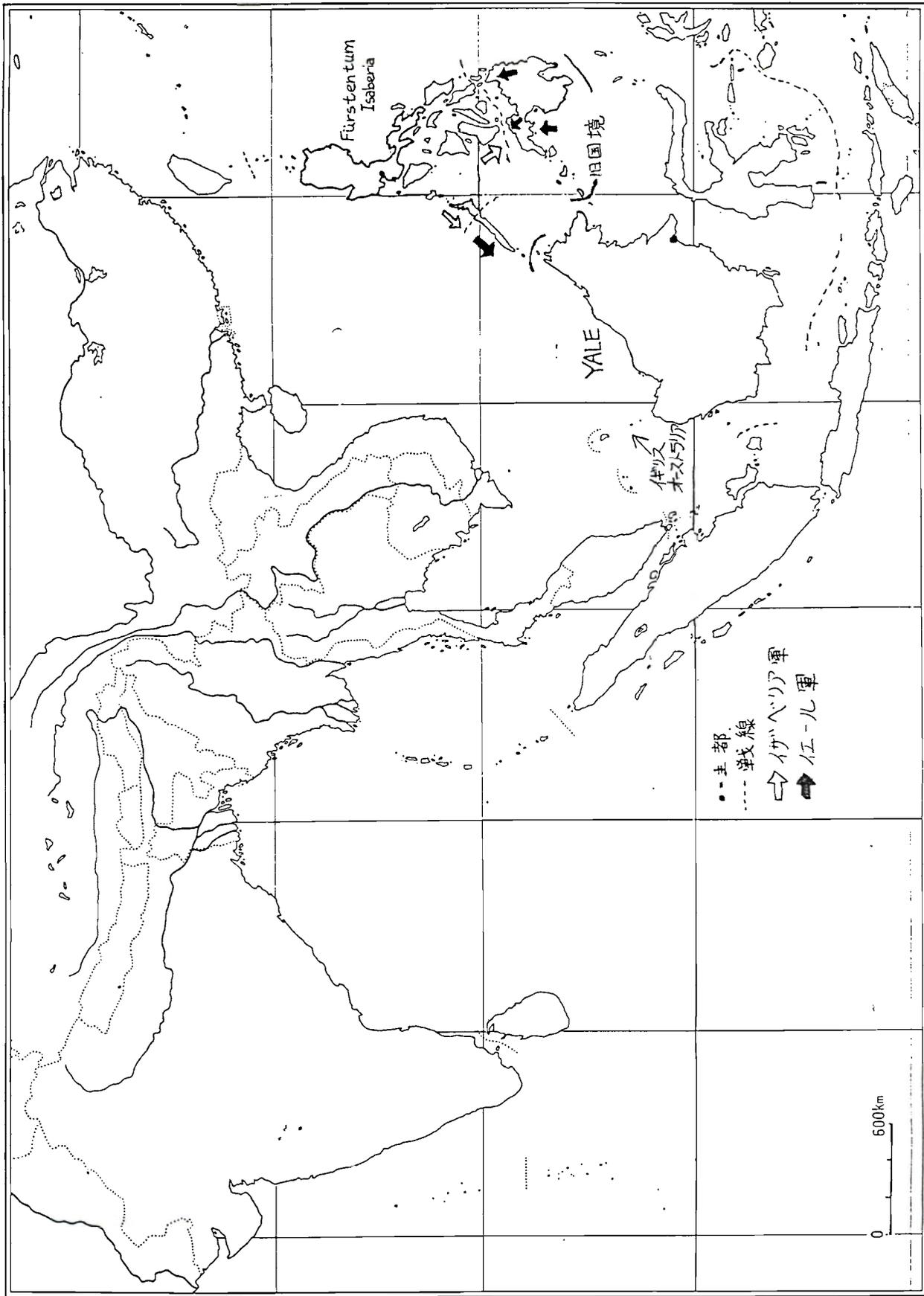
「すぐ来るわよ」

「誰呼んだのよ」

「永野」

それを聞いたとたん、榛名は力を失ってその場に座りこんでしまった。

(ACT. 6 続)



Fürstentum
Isabera

YALE

伊弉諾
伊弉諾

旧国境

- 主部
- 戦線
- ⇨ イガベリア軍
- ⇨ イェル軍

0 600km